

2019年6月4日

2019年度 「新入社員 意識調査」 今年の新入社員のタイプは“タイマー付きのAIスピーカー”

足利銀行（頭取 松下 正直）のシンクタンクである「あしぎん総合研究所」（社長 加藤 潔）は、栃木県内の企業や自治体（一部県外を含む）の新入社員を対象に「2019年度 新入社員意識調査」を行いましたので、その結果を別紙のとおり発表いたします。今回のポイントは下記のとおりです。

記

超売り手市場で AI スピーカーのように注目されている新卒者。AI スピーカーはこちらの呼びかけ（指示）に応えるのが仕事だが、今年の新入社員は勤務条件などが設定済みで、時間外には断られる可能性も。AI（人工知能）搭載だが、学習スイッチを入れるには丁寧な指導育成と環境整備が求められる。

すでに転職を考える新卒者も 3 割おり、日々の終業時刻だけでなく、数年後にもタイマーが鳴り、会社から消えていなくなってしまう可能性も…

※“AI スピーカー”とは産労総合研究所命名の今年度の新入社員のタイプ

<調査結果のポイント>

1. 7割近くが「前年秋」までに内定獲得。3人に1人がインターンシップ先に就職している

- ◇ 新卒者の訪問企業数は「5社以内」が過去最高の75%。半数は「1～2社」のみの訪問で就職活動を終えた様子。女性は「前年夏より前」に内定をもらった人の割合が男性を超え過去最高の34.9%。
- ◇ 新卒者の半数近くがインターンシップをしており、その内の3人に1人がインターンシップ先に就職。特に男性は4割がインターンシップ先に就職を決めている。

2. 会社を選ぶ基準は「休日が多い」「残業が少ない」などの条件を重視する傾向が強まる

- ◇ 「働きたい業界・業種」は年々減り続け過去最低(54.0%)に。替りに「休日が多い」「残業がない・少ない」「福利厚生がいい」などの勤務条件を重視する傾向が強まっている。

3. 売り手市場の就職活動を経て、仕事にも楽観ムード

- ◇ 就職にあたり不安に感じていることでは、「会社の業績の悪化」や「思った通りの収入が得られるか」など多くの項目が昨年度を下回り、全体に楽観的な様子が窺える。

4. 女性の活躍がますます期待される

- ◇ 専業主婦志向の女性は過去最低の18.2%となり、就職先を選ぶ際にも女性が活躍しているかを重視する傾向に。出世についても、男性は「平社員のままでいい」が過去最高になったが、女性は「平社員のまま」が減り、「係長」や「リーダー職」が増えた。

5. せっかく採用しても…

- ◇ すでに転職を考える人も約3割。仕事と友人の約束が重なった場合「仕事優先派」は過去最低となり、特に男性は「仕事優先派」が昨年度を大きく下回り、過去最低の6割になった。

本件に関するお問い合わせ先：(株)あしぎん総合研究所 経営サポート部 野内(やない) 028-908-6112



足利銀行

MEBUKI
めぶきフィナンシャルグループ

足利銀行

栃木県宇都宮市桜4丁目1番25号 〒320-8610

TEL.028-622-0111(大代表) www.ashikagabank.co.jp

2019年度 「新入社員 意識調査」 今年の新入社員のタイプは“タイマー付きのAIスピーカー”

栃木県の企業や自治体（一部県外含む）の今年の新入社員は、超売り手市場だった就職活動を反映して非常に楽観的。「休日の多さ」や「残業のなさ」などの勤務条件を重視し、仕事と友人の約束では友人を優先する傾向がますます高まっている。すでに転職を考える新卒者も3割おり、日々の終業時刻だけでなく、数年後にもタイマーが鳴り、会社から消えていなくなってしまう可能性も…

超売り手市場でAIスピーカーのように注目されている新卒者。AIスピーカーはこちらの呼びかけ（指示）に応えるのが仕事だが、今年の新入社員は勤務条件などが設定済みで、時間外には断られる可能性も。AI（人工知能）搭載だが、学習スイッチを入れるには丁寧な指導育成と環境整備が求められる。

※“AIスピーカー”とは産労総合研究所命名の今年度の新入社員のタイプ

<ポイント>

1. 7割近くが「前年秋」までに内定獲得。3人に1人がインターンシップ先に就職している

◇新卒者の訪問企業数は「5社以内」が過去最高の75%。半数は「1～2社」のみの訪問で就職活動を終えた様子。女性は「前年夏より前」の内定獲得者の割合が男性を超え過去最高の34.9%。

◇新卒者の半数近くがインターンシップをしており、その内の3人に1人がインターンシップ先に就職。特に男性は4割がインターンシップ先に就職を決めている。

2. 会社を選ぶ基準は「休日が多い」「残業が少ない」などの条件を重視する傾向が強まる

◇「働きたい業界・業種」は年々減り続け過去最低(54.0%)に。替りに「休日が多い」「残業がない・少ない」「福利厚生がいい」などの勤務条件を重視する傾向が強まっている。

3. 売り手市場の就職活動を経て、仕事にも楽観ムード

◇就職にあたり不安に感じていることでは、「会社の業績の悪化」や「思った通りの収入が得られるか」など多くの項目が昨年度を下回り、全体に楽観的な様子が窺える。

4. 女性の活躍がますます期待される

◇専業主婦志向の女性は過去最低の18.2%となり、就職先を選ぶ際にも女性が活躍しているかを重視する傾向に。出世についても、男性は「平社員のままでいい」が過去最高になったが、女性は「平社員のまま」が減り、「係長」や「リーダー職」が増えた。

5. せっかく採用しても…

◇すでに転職を考える人も約3割。仕事と友人の約束が重なった場合「仕事優先派」は過去最低となり、特に男性は「仕事優先派」が昨年度を大きく下回り、過去最低の6割になった。

<調査概要> ※本調査は2009年度から実施しているものである。

(1) 調査期間 : 2019年3月25日～4月18日

(2) 調査対象 : あしぎん新入社員セミナー受講生、新入社員向け出張研修受講生
(セミナー開催回数 栃木県8回、群馬県1回、出張研修5回)

(3) 有効回答数 : 705名 (回答率 100.0%)

(4) 内 訳 : 男性389名、女性316名

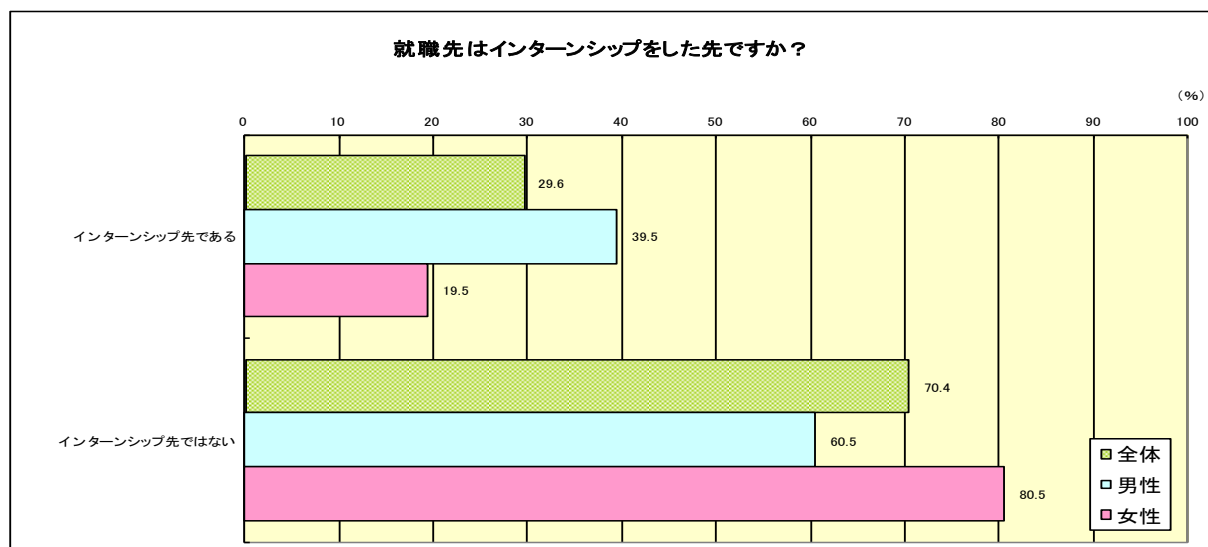
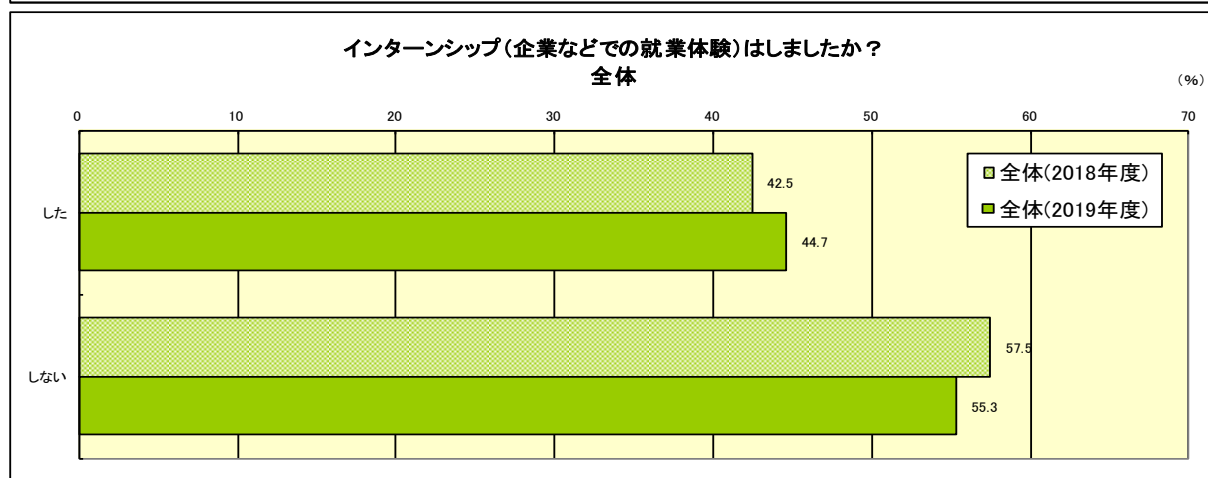
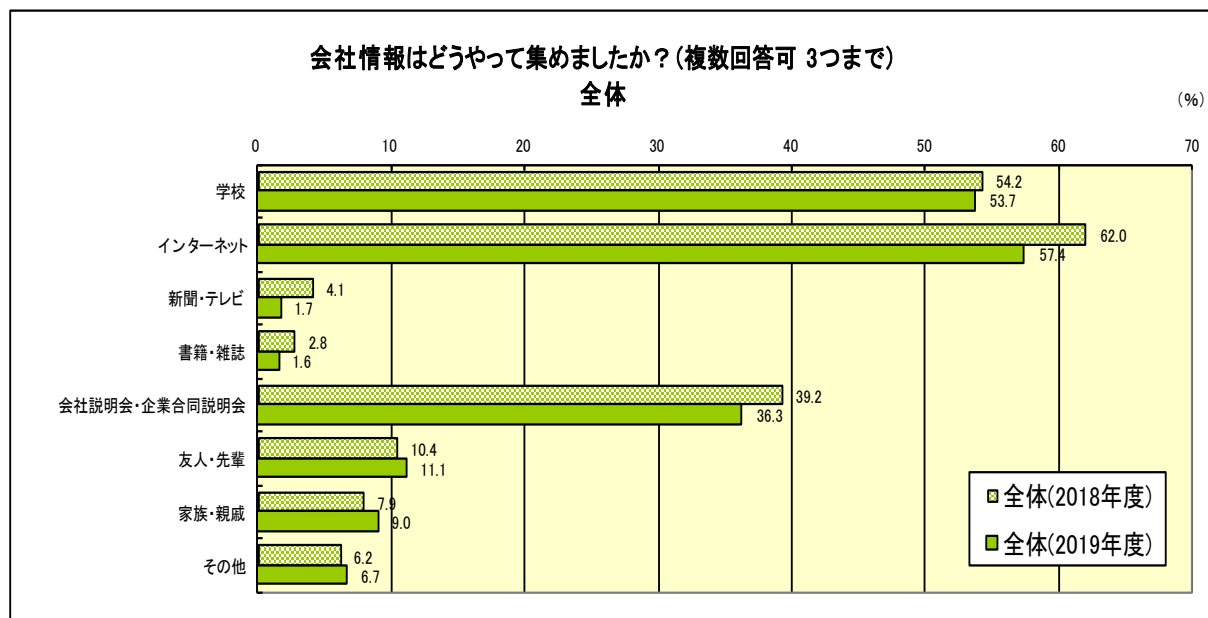
大学・大学院 38.2%、高専・短大・専門学校 16.1%

高校 27.7%、中途採用・その他 18.0%

1. 会社情報の収集方法について

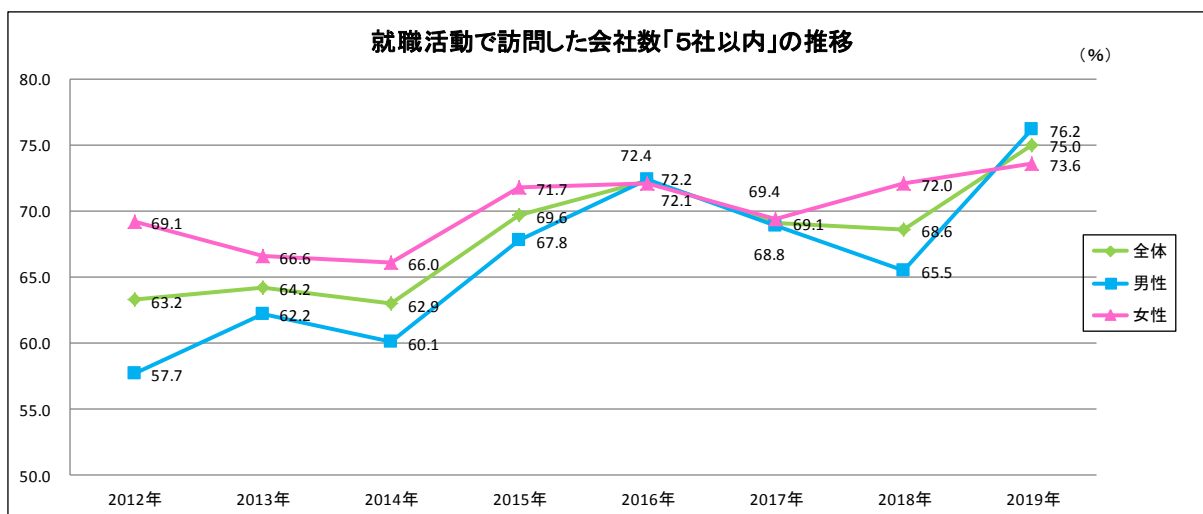
会社情報の収集方法は、男女ともに「インターネット」が最も多く 57.4%、次いで「学校」53.7%、「会社説明会・企業合同説明会」36.3%の順。「友人・先輩」も 11.1%となった。

企業などで就業体験をするインターンシップについては、インターンシップを「した」が男女ともに前年度より増え 44.7%と半数近い。その内インターンシップ先に就職をした人も前年度より増え 3 人に 1 人となった (29.6%)。特に男性は 4 割がインターンシップ先に決めている。

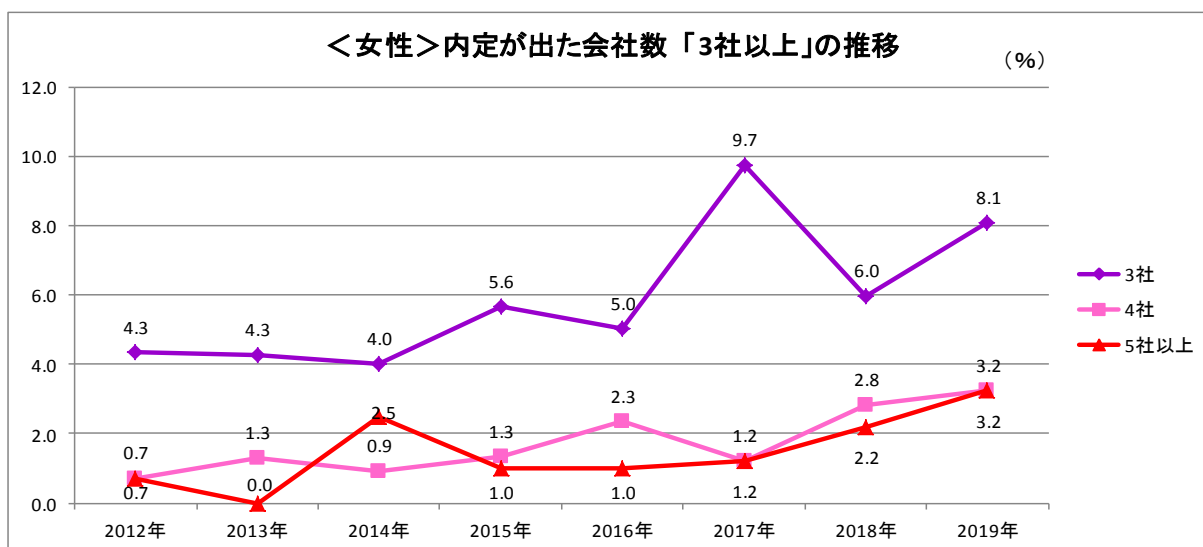
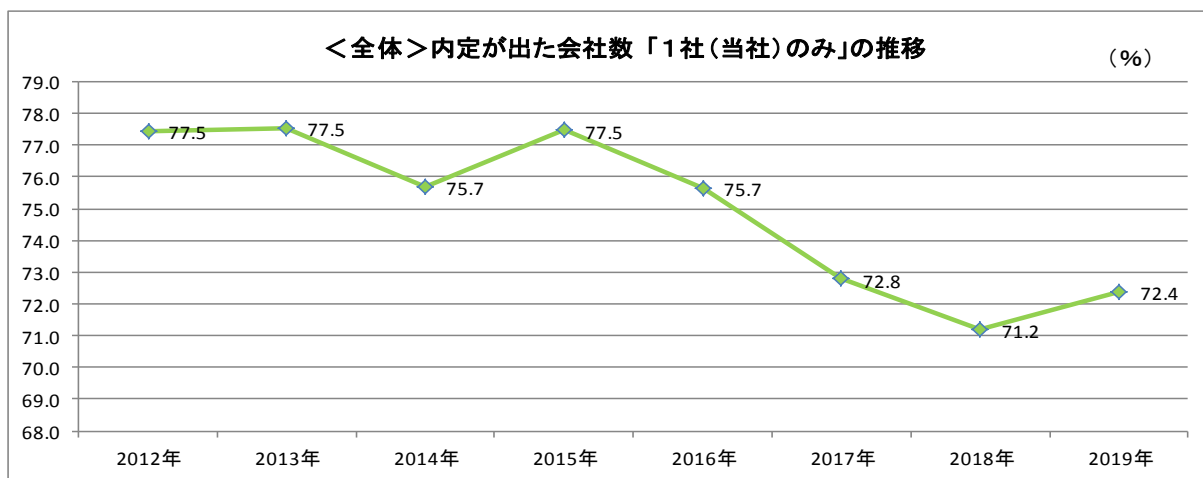


2. 就職活動の状況について

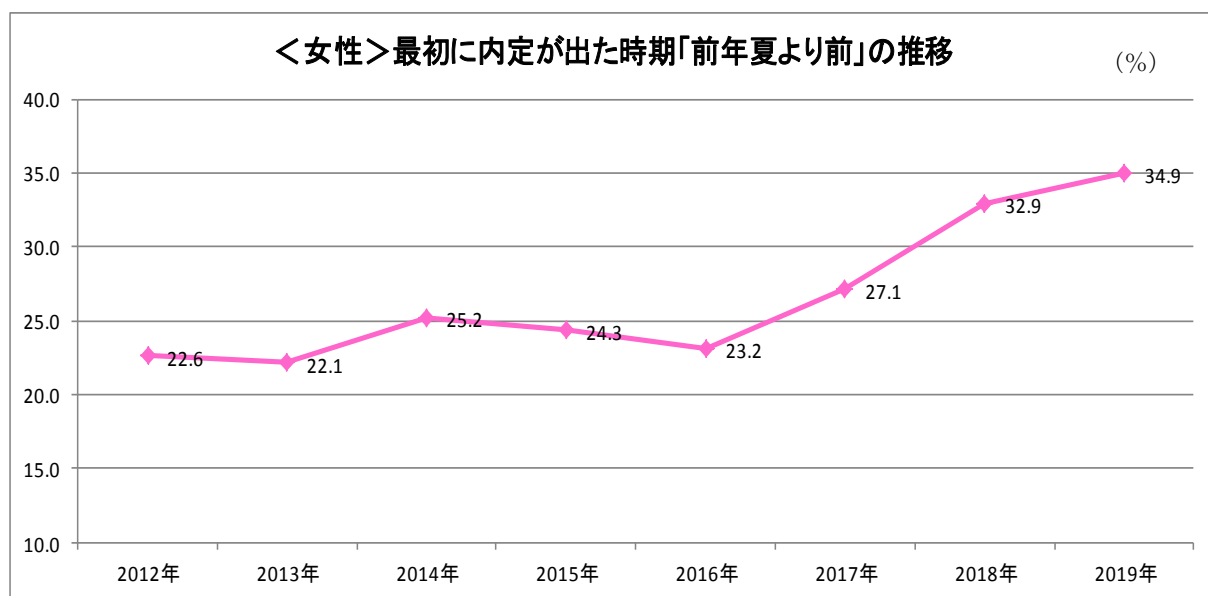
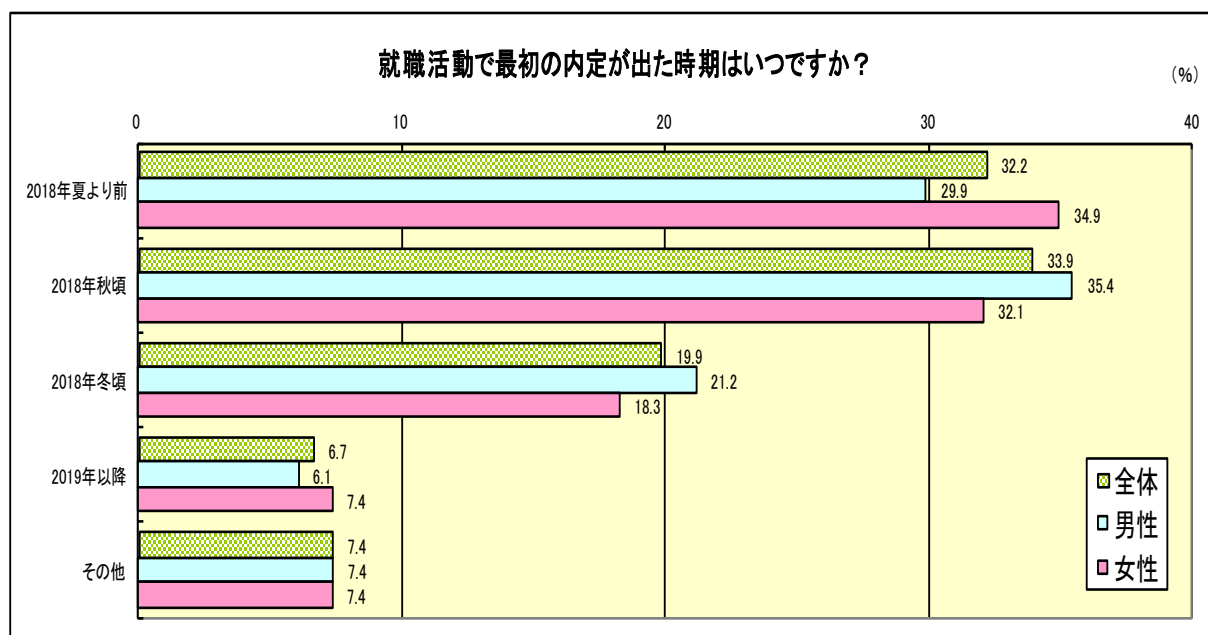
新卒者の訪問企業数（会社説明会を含む）は、例年同様「1～2社」（47.3%）、「3～5社」（27.7%）、「6～10社」（12.1%）の順だが、「1～2社」「3～5社」の合計が過去最高の75%となり、就職活動は順調に行えた様子。特に男性は2人に1人が「1～2社」（50.0%）のみの訪問で決めている。



内定企業数は「1社（当社）のみ」（72.4%）「2社」（15.8%）「3社」（7.2%）の順で例年と変わらないが、「1社のみ」は昨年度の過去最低に次ぐ割合となり、複数の会社から内定をもらった人が増えている。特に女性は「4社」「5社以上」から内定をもらった人がそれぞれ3.2%と過去最高となった。

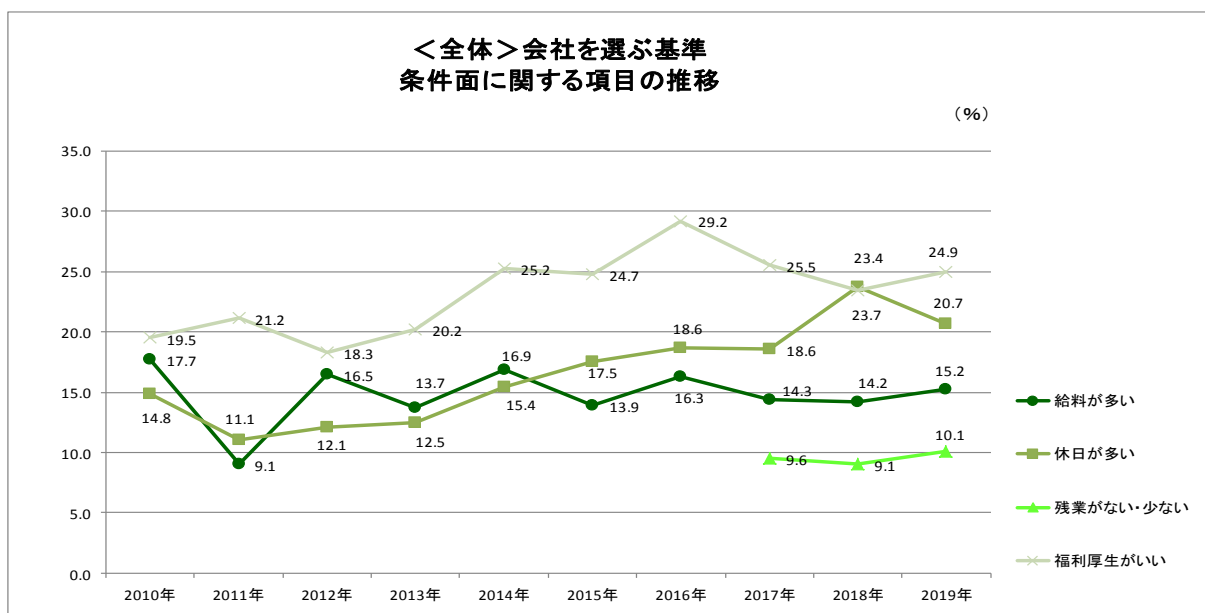
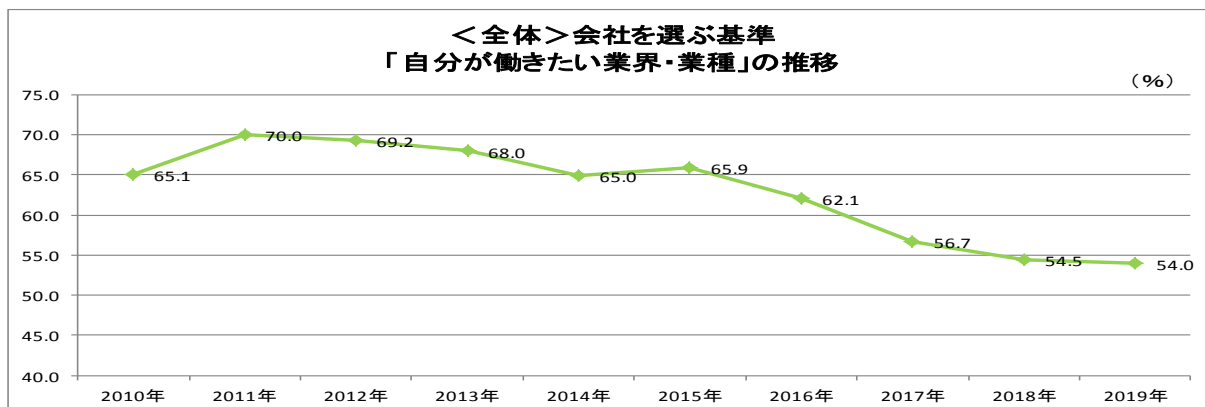
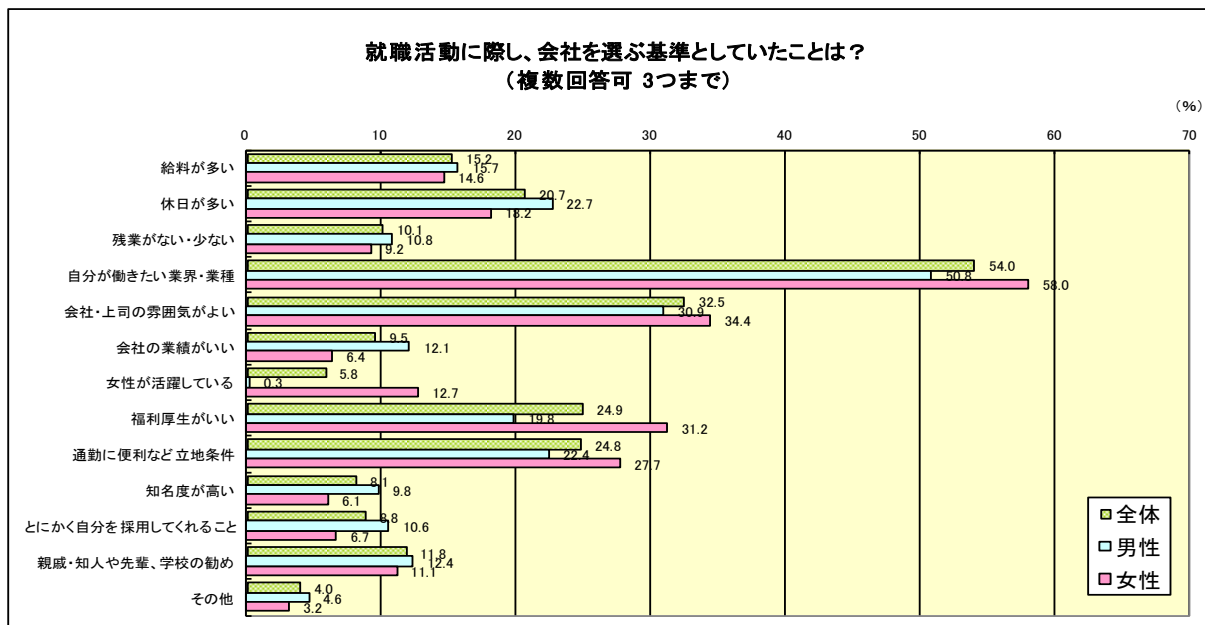


内定が最初に出た時期は「前年夏より前」(32.2%)が過去最高だった昨年度に次ぐ割合となり、7割近くが前年秋までに内定をもらっている。特に女性は「前年夏より前」(34.9%)が過去最高になるなど、男性を超える売り手市場だった様子が窺える。



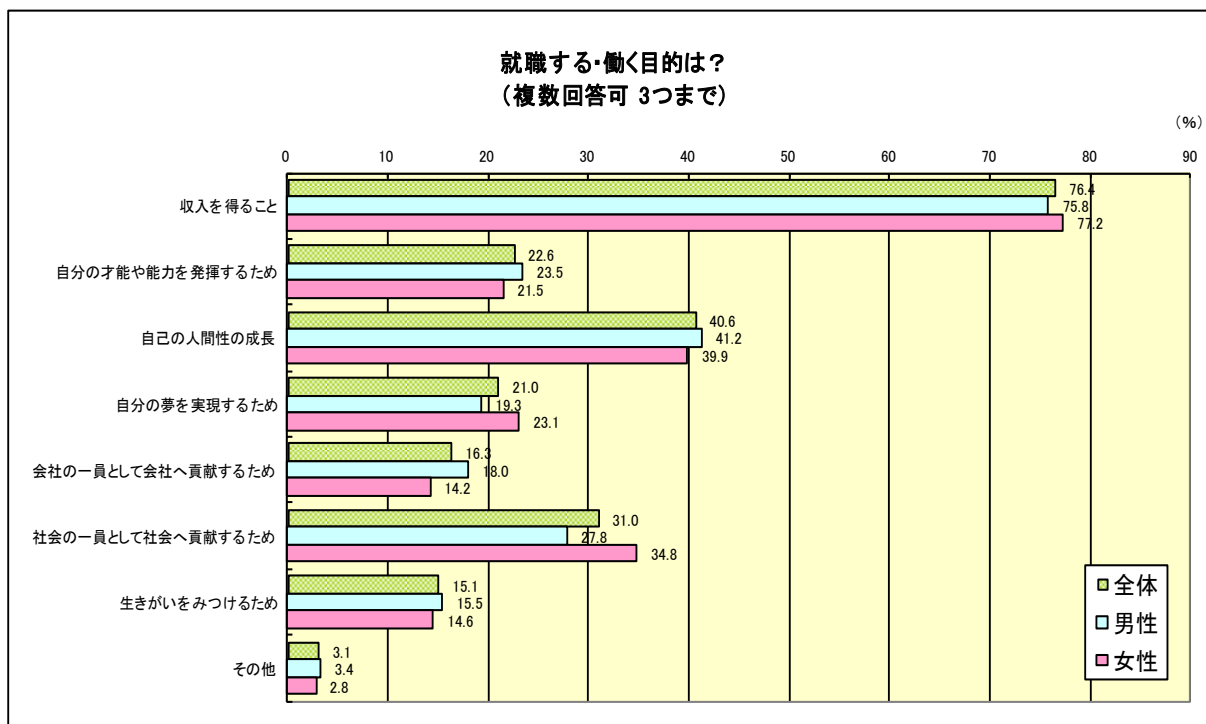
3. 就職活動に際し、会社を選ぶ基準としていたことは？

トップ3の順位は「自分が働きたい業界・業種」(54.0%)「会社・上司の雰囲気が良い」(32.5%)「福利厚生が良い」(24.9%)の順となったが、1位の「自分が働きたい業界・業種」は過去最低となり、代わりに「休みが多い」が昨年度に続き2割台に、「残業がない・少ない」も1割を超え条件重視の傾向が高まっている。特に女性は「福利厚生が良い」(31.2%)が過去最高となったほか、「女性が活躍している」(12.7%)が初めて1割を超えた。



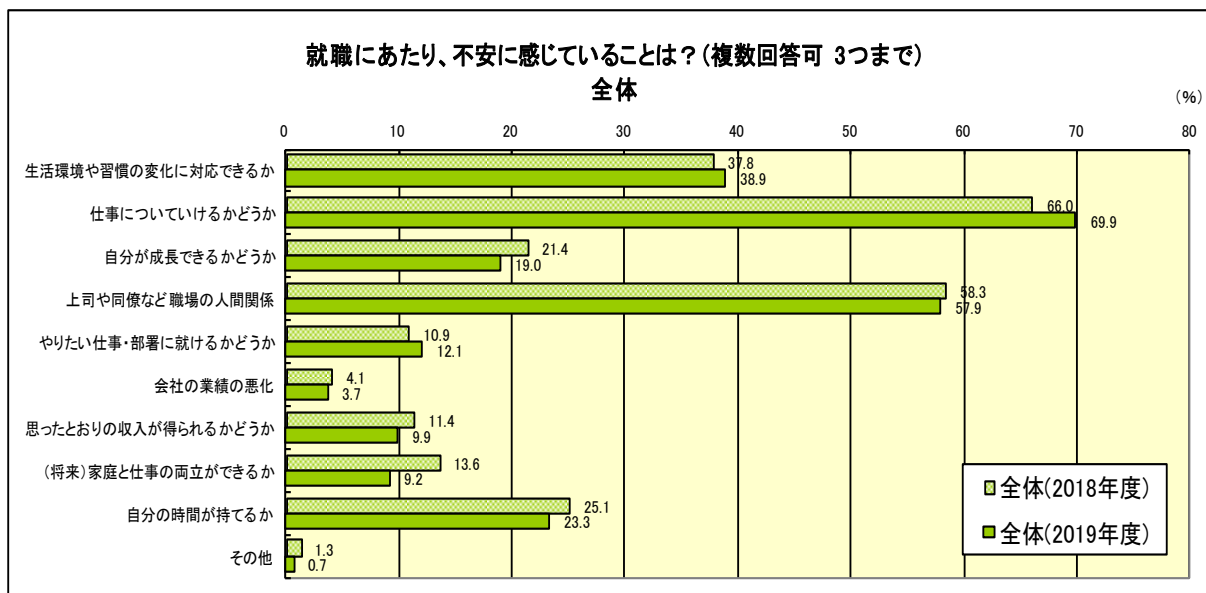
4. 就職する・働く目的は？

1位は「収入を得ること」で76.4%。次いで「自己の人間性の成長」(40.6%)「社会の一員として社会へ貢献するため」31.0%でトップ3は例年同様の結果となった。



5. 就職にあたり、不安に感じていることは？

「仕事についていけるかどうか」(69.9%)が最も多く、次いで「上司や同僚など職場の人間関係」(57.9%)「生活環境や習慣の変化に対応できるか」(38.9%)の順。全体に順位は例年と変わらないが、「仕事についていけるか」「生活環境や習慣の変化に対応できるか」「やりたい仕事・部署に就けるか」(12.1%)を除いてすべての項目が昨年度を下回り、売り手市場の就職活動を反映してか全体に楽観的な様子が窺える。



特に「自分が成長ができるかどうか」(19.0%)「上司や同僚など職場の人間関係」(57.9%)「会社の業績の悪化」(3.7%)「(将来)家庭と仕事の両立ができるか」(9.2%)「自分の時間が持てるか」(23.3%)はいずれも過去最低となった。

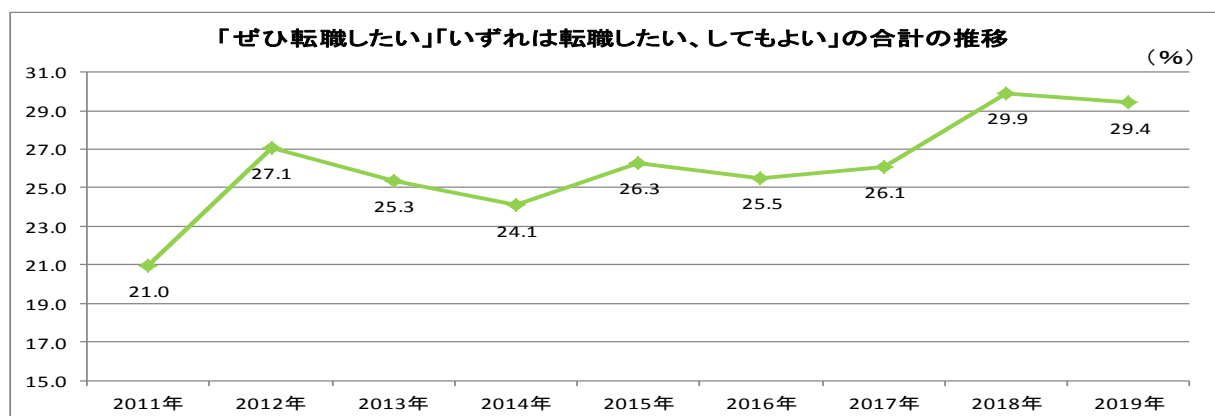
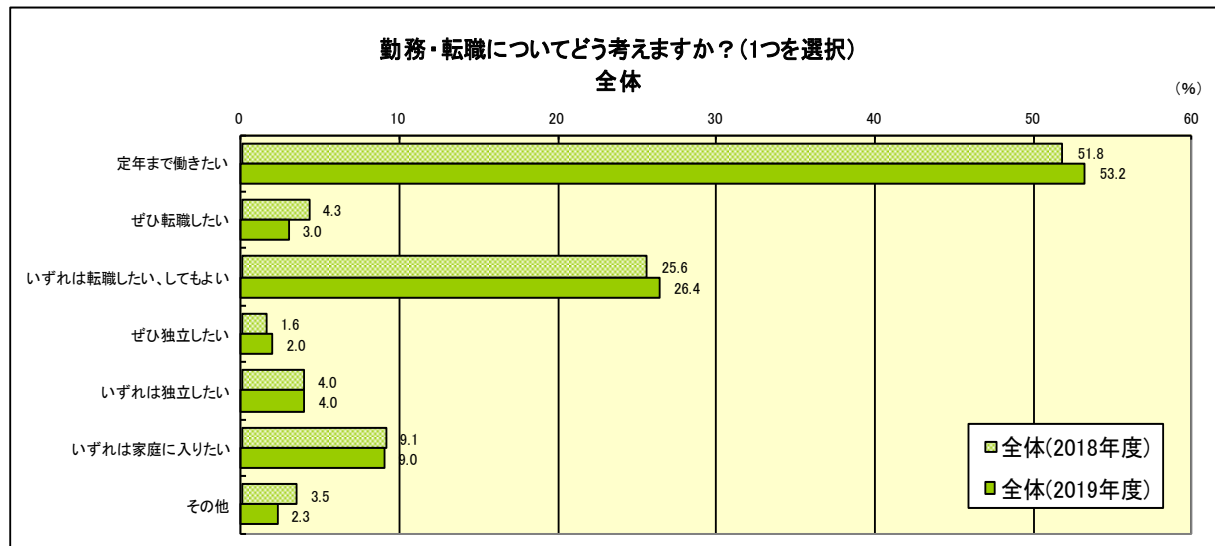
就職にあたり、不安に感じることは？(複数回答可 3つまで)

年度	単位: %									
	生活環境や習慣の変化に対応できるか	仕事についていけるかどうか	自分が成長できるかどうか	上司や同僚など職場の人間関係	やりたい仕事・部署に就けるかどうか	会社の業績の悪化	思ったとおりの収入が得られるかどうか	(将来)家庭と仕事の両立ができるか	自分の時間が持てるか	その他
2010年	45.8	67.6	23.8	65.6	13.9	10.6	12.0			3.3
2011年	44.4	73.7	31.6	64.4	9.8	5.8	11.1			1.8
2012年	50.1	70.2	28.1	62.9	10.4	4.8	9.0			2.6
2013年	47.0	74.2	25.9	62.6	10.2	4.7	8.7			2.4
2014年	47.7	69.7	26.9	67.2	10.7	6.4	13.1			1.2
2015年	48.2	70.5	22.5	66.4	12.5	5.5	9.4			1.7
2016年	42.6	72.9	26.1	62.1	11.5	5.5	12.8			1.1
2017年	39.3	66.8	20.2	58.0	8.9	4.2	9.4	14.3	24.1	0.7
2018年	37.8	66.0	21.4	58.3	10.9	4.1	11.4	13.6	25.1	1.3
2019年	38.9	69.9	19.0	57.9	12.1	3.7	9.9	9.2	23.3	0.7
	過去最低			昨年度比減						

6. 勤務・転職等についてどう考えるか？

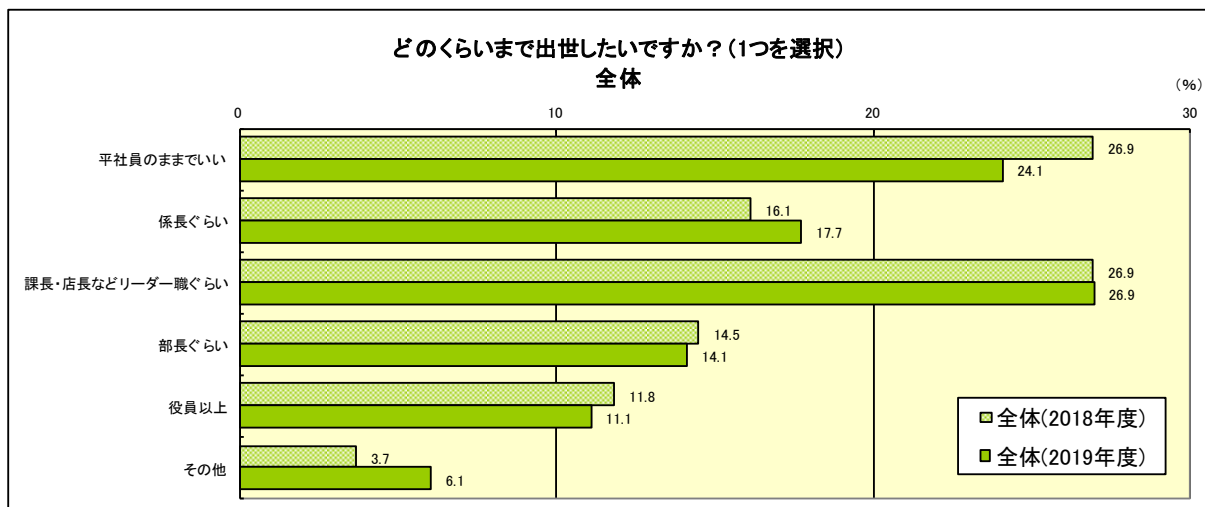
「定年まで働きたい」が最も多く53.2%で、この7年間で最も低かった昨年度をкаろうじて上回った。2位の「いずれは転職したい、してもよい」(26.4%)と5位の「ぜひ転職したい」(3.0%)は両方を合わせると29.4%に上り、昨年同様3割がすでに転職を視野に入れている。

男女別では、「いずれは家庭に入りたい」と答えた女性が過去最低の18.2%となった。

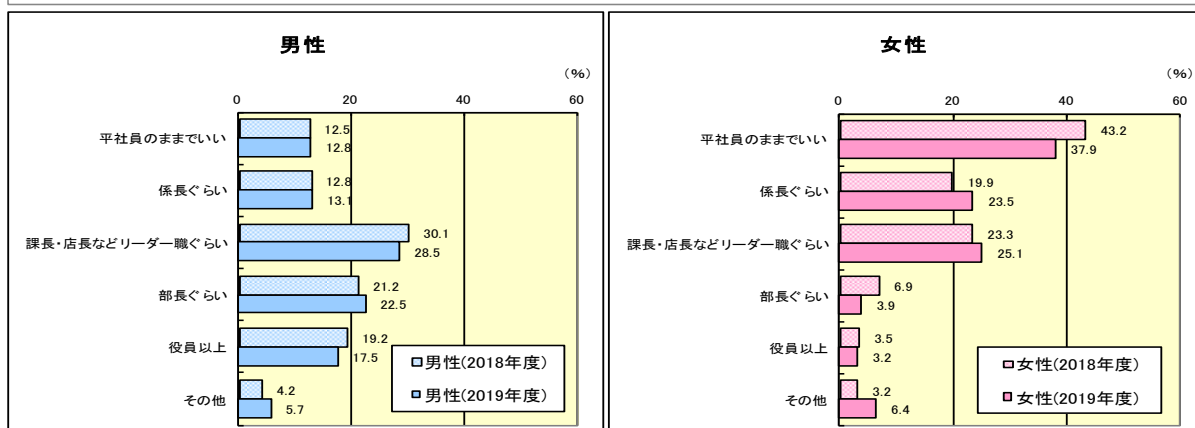
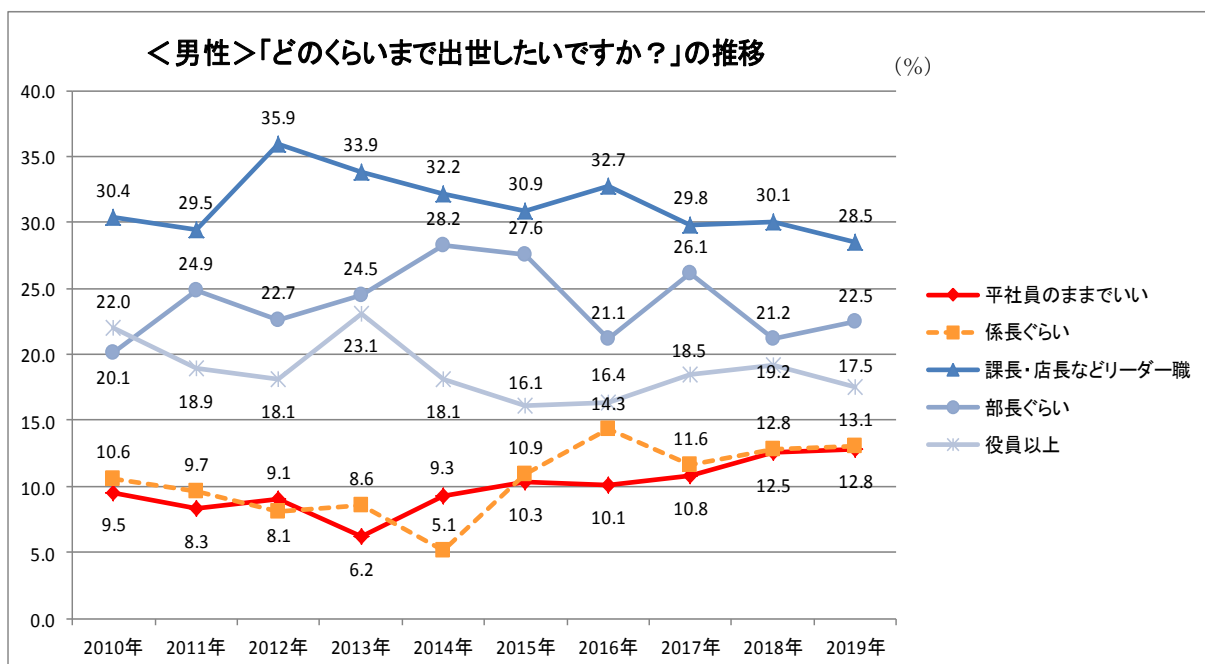


7. どのくらいまで出世したいか？

全体では、昨年度同率1位だった「平社員のまま」と「課長・店長等のリーダー職」は「平社員のまま」(24.1%)がわずかに減少し、年々減っていた「課長・店長等のリーダー職」(26.9%)が1位を取り戻した。

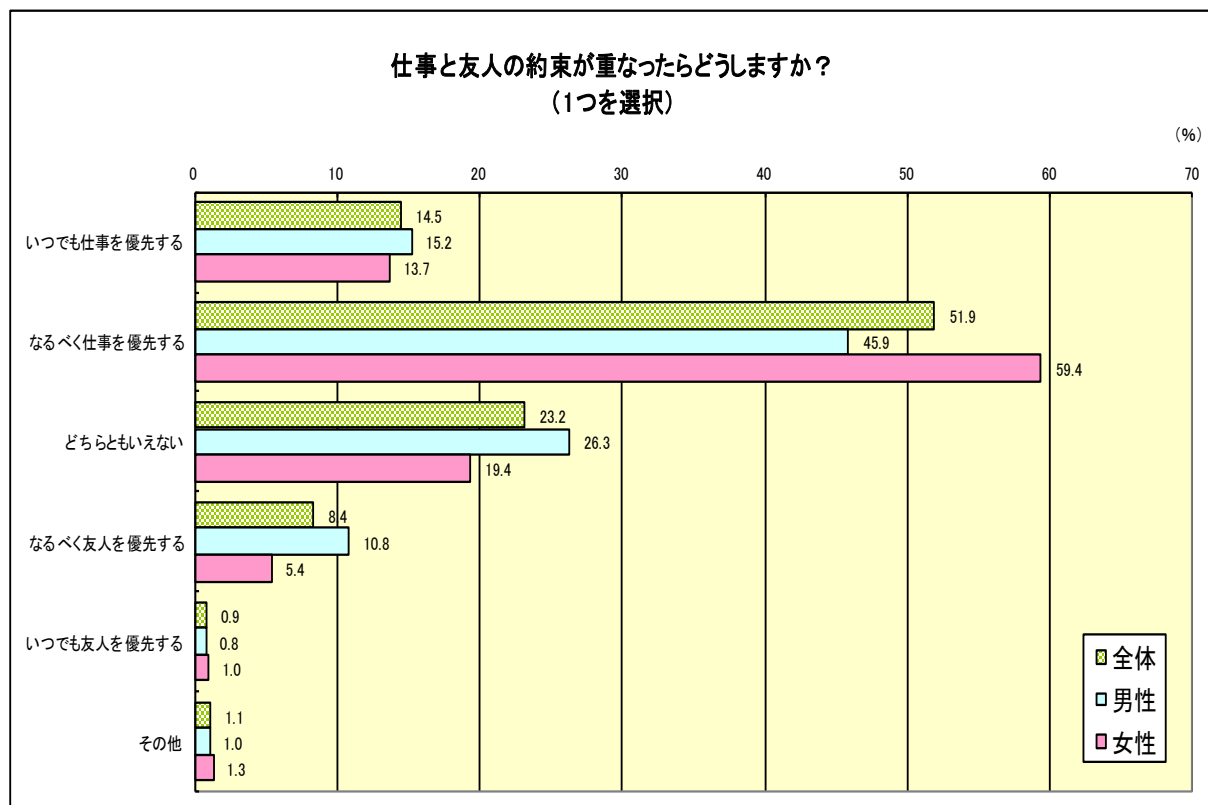


男女別では、男性は「リーダー職」「部長」「役員以上」、女性は「平社員」「リーダー職」「係長」の順で、男女別の順位はほぼ変わらないが、男性は「平社員のまま」(12.8%)が過去最高を更新。女性は昨年度との比較では、「平社員のまま」(37.9%)が減少し、替わって「係長」(23.5%)「リーダー職」(25.1%)が増加した。

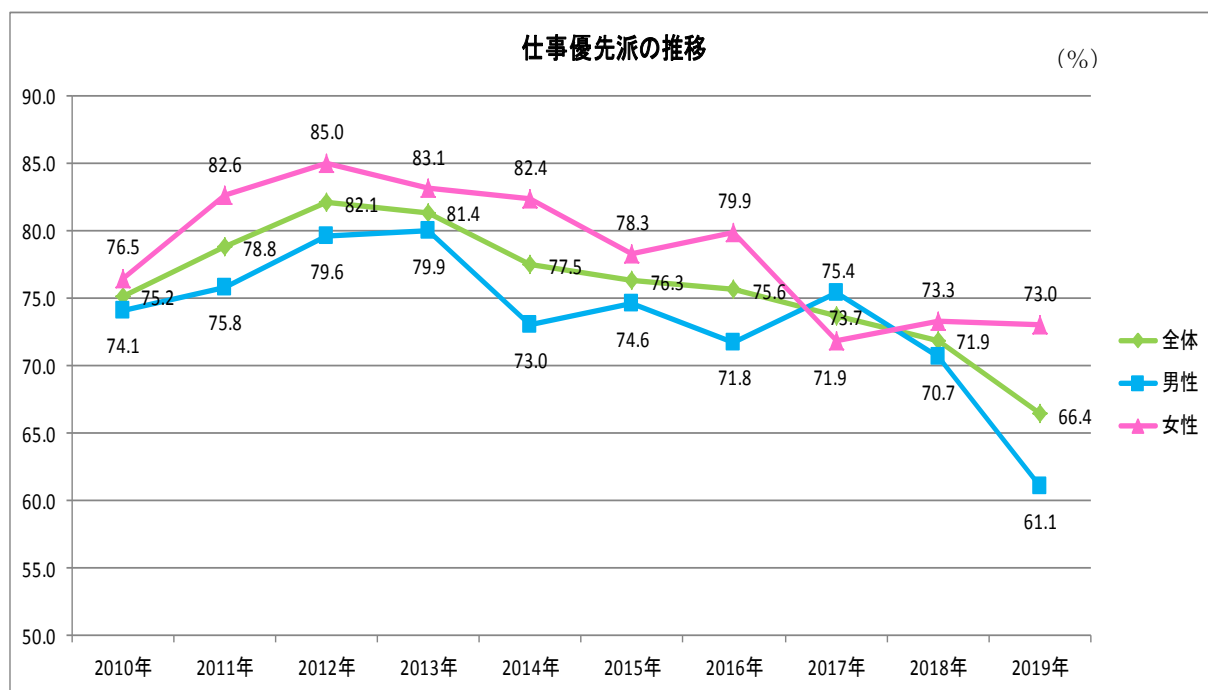


8. 仕事（残業など）と友人の約束（食事や飲み会など）が重なったらどうするか？

「いつでも仕事を優先」(14.5%)と「なるべく仕事を優先」(51.9%)を合わせた“仕事優先派”は2012年をピークに下がり続け過去最低の66.4%となり、ワークライフバランス重視の傾向はますます強まっている。



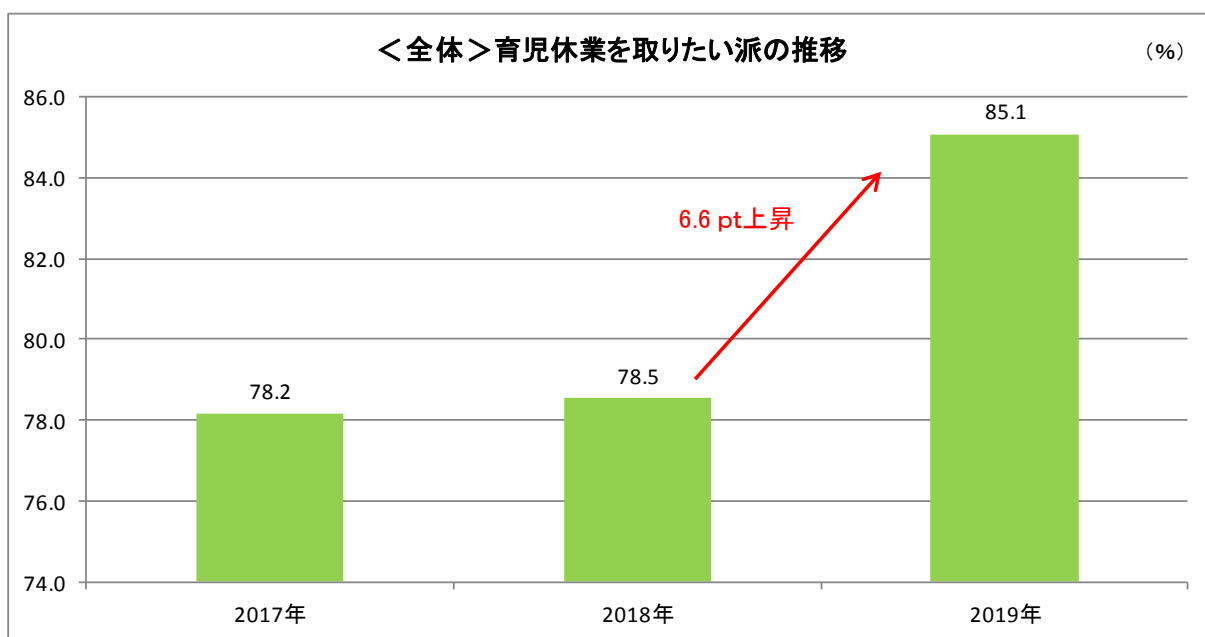
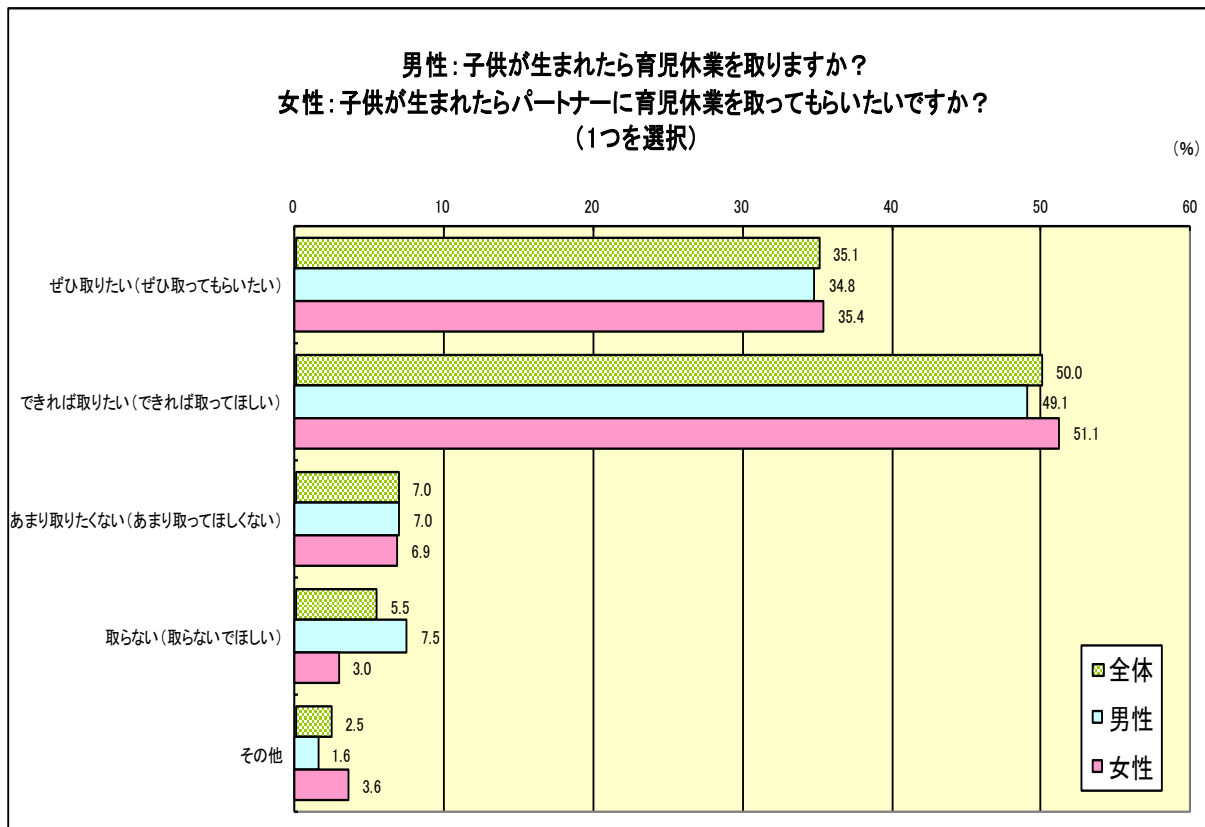
特に男性は“仕事優先派”が過去最低の61.1%と初めて6割台になり、女性と大きく差が開いた。



9. 男性：子供が生まれたら育児休業を取りますか？

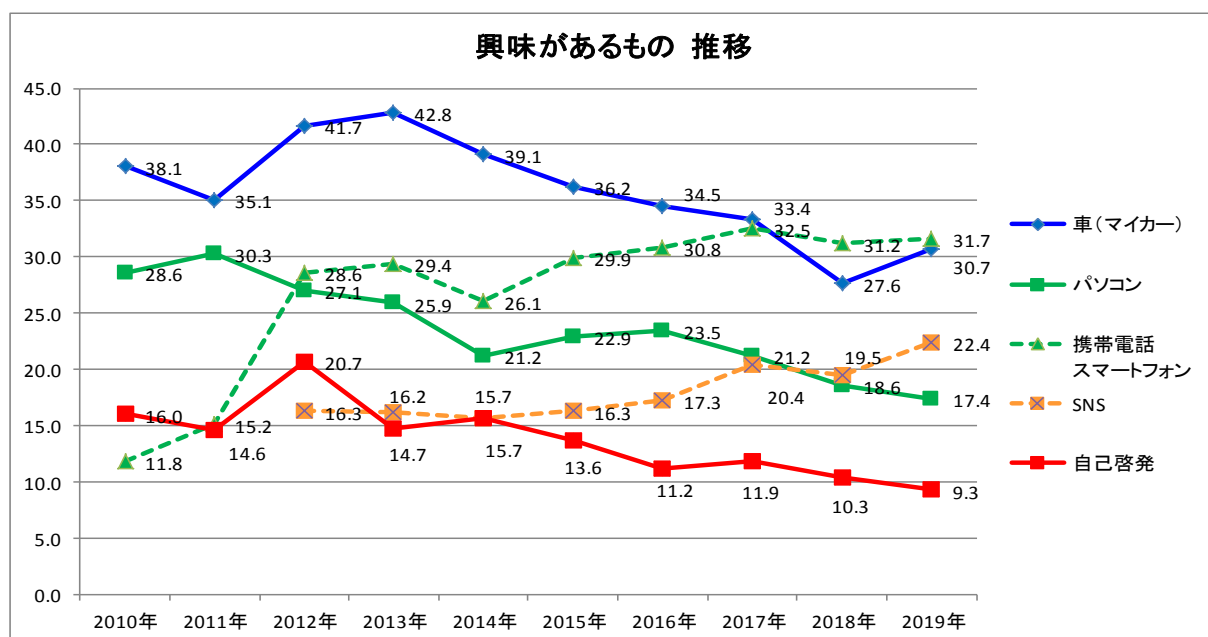
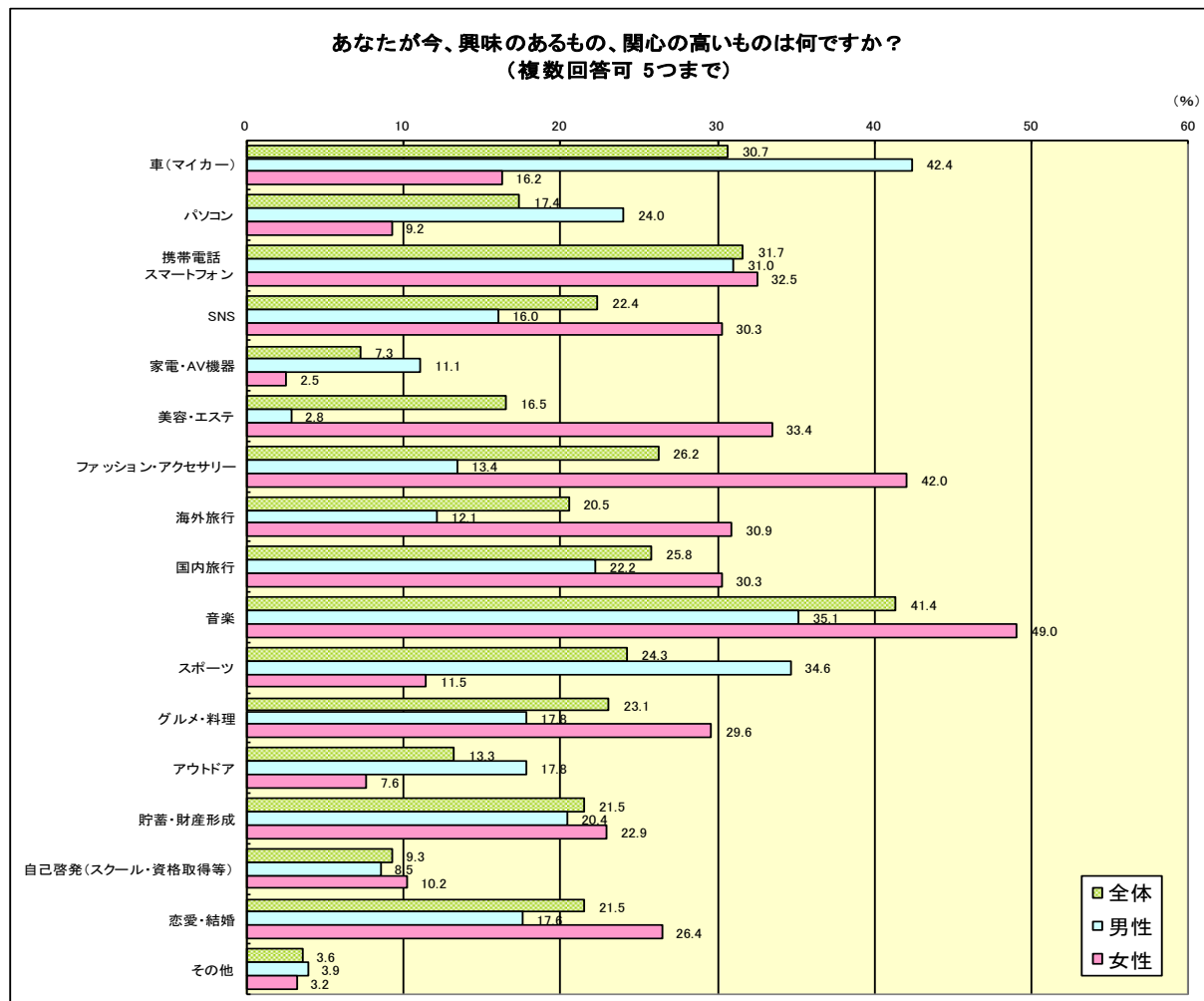
女性：子供が生まれたらパートナーに育児休業を取ってもらいたいですか？

「ぜひ取りたい（ぜひ取ってもらいたい）」は調査開始の2017年以来、過去最高の35.1%となり、男女共に過去最高となった。「ぜひ取りたい（ぜひ取ってもらいたい）」「できれば取りたい（できれば取ってほしい）」を合わせた“育児休業を取りたい派”は85.1%で、これまでを大きく上回った。



10. あなたが今、興味のあるもの、関心の高いものは何か？

全体では1位「音楽」(41.4%)で、次いで「携帯電話・スマートフォン」(31.7%)「車(マイカー)」(30.7%)の順。「車」は過去最低だった昨年度に次ぐ低さとなった。「携帯電話・スマートフォン」が年々増える中、逆に「パソコン」は減少し昨年度に続き過去最低の17.4%。「SNS」(22.4%)は過去最高となった。そのほか過去最低となったのが「自己啓発(スクール・資格取得等)」(9.3%)で、初めて1割を切った。



以上